

『大和物語』一二五段「かささぎのわたせる橋」について

寶 槻 た ま き

『大和物語』一二五段「かささぎのわたせる橋」の問題点

『大和物語』一二五段では、酒に酔った藤原定国が突然夜中に時平郎を訪れ、忠岑が定国に代わって訪問の挨拶として「かささぎの…」の歌を詠む。以下に本文を掲げ、この「かささぎの…」の歌の解釈について検討を行う。

泉の大將、故左のおほいどのにまうでたまへりけり。ほかにて酒などまあり、酔ひて、夜いたくふけて、ゆくりもなくものしたまへり。大臣おどろきたまひて、「いづくにもものしたまへるたよりにかあらむ」など聞えたまひて、御格子あげさわぐに、壬生忠岑、御ともにあり。御階のもとに、松ともしながらひざまづきて、御消息申す。「かささぎのわたせる橋の霜の上を夜半にふみわけことさらにこそとなむのたまふ」と申す。あるじの大臣、いとあはれにをかしとおぼして、その夜、夜ひと夜、大御酒まあり、遊びたまひて、大將も物かづき、忠岑も禄たまはりなどしけり。

るかかささぎの橋」(続古今集・冬・六一六)を挙げている。しかしこれはかなり時代が下った例であり、『大和物語』の忠岑の歌に詠まれる「かささぎのわたせる橋」が時平郎の階段を意味して詠まれたとする解釈が妥当であるのか、という疑問が残る。

「かささぎのわたせる橋」について、『大和物語』の古注釈を見てみると、室町時代後期の『大和物語抄』では、「かさ、ぎのわたせる橋、たゞ寒天のふけゆく空すみわたり、銀河のな、めにみゆる景色也」とあり、早くは「かささぎのわたせる橋」を時平郎の階段とは解釈していなかったことがわかる。この場合、「かささぎのわたせる橋」は「銀河のななめにみゆる景色」、つまり空に天の川がかかる実景を詠んでいるのだとしている。定国が時平郎を訪れた時、冬の夜空に天の川が見えたことによつて忠岑は「かささぎのわたせる橋」と詠んだというのである。また、賀茂真淵の『大和物語直解』では、「かさ、ぎの橋は唐詩に鴈橋邊鴈鵲起とある如く禁中の橋をいふ」と、唐の李邕の詩を根拠に挙げ、「かささぎのわたせる橋」を宮中の橋であると解釈している。これは、「宮中や貴人の邸宅を天上になぞらえ」という点で「かささぎのわたせる橋」を時平郎の階段と解する前段階の解釈といえる。このように、「かささぎの渡せる橋」は通説となつて「時平郎の階段」以外にも、多様に解釈されてきた。

一方、現在の通説である「時平郎の階段」とする考え方は、『大和物語虚静抄』に次のような詳しい説明が見える。

かさ、ぎのわたせるはしにをく霜のしろきをみれば夜ぞ更けにける
とある家持卿の歌を本歌にてよめる也かさ、ぎの橋とは淮南子に
烏鵲填河成橋渡織女」とあり織女をわたすとあれば七夕の事な
れども爰にかり用ひてはしに置わたしたる霜のけしきを天上の烏鵲

忠岑の歌に詠まれる「かささぎの橋」は『淮南子』に「烏鵲填河成橋而渡織女」とあり、七夕の夜に牽牛と織女が逢う際に、天の川に鵲が橋となつて織女を渡すという伝説に基づいた表現である。しかしながら、『大和物語』一二五段の「かささぎの…」の歌について、『新編日本古典文学全集』(以下『新編全集』)は「寝殿の階段に置いた霜の上を、この夜更けにふみ分けて、わざわざうかがつたわけで、よそへ行つたついでではございません」とし、「かささぎの渡せる橋」を時平郎の階段と現代語訳している。また、頭注では先に掲げた『淮南子』を踏まえ、「宮中や貴人の邸宅を天上になぞらえて、その階段をいうようになる」と解説する。このように、忠岑の歌に詠まれる「かささぎの渡せる橋」を「時平郎の階段」であるとする解釈は、『大和物語全釈』や『講談社学術文庫 大和物語』などにも見られ、現在の通説となつていく。「かささぎの橋」はもともと七夕の伝説に拠る表現であるのにも関わらず、なぜ伝説と切り離し、時平郎の階段という現実の具体的な場所を表す表現として用いられたのだろうか。『新編全集』はこの忠岑の歌の参考歌として『続古今集』所収の順徳院の歌「深き夜のくもるの月やさえぬらん霜に渡せ

橋に思ひよそへてむ也又橋階同訓にてまへの詞に御はしのもとになどあればその心もをのづからかよふべし歌心はいづくに物し給ふたよりにはなとはせ給ふによりて事の序にはおはしまさず夜ふかき霜をふみ分てわざと此殿へとておはせしと深切なる情をあらはし侍る也

ここでいう「かささぎのわたせる橋」とは、『大和物語』の地の文に見える「御階のもとに」を受け、「橋」と「階」の同訓によつて、七夕の「かささぎの橋」を用い、実際に階段に霜が置いている景色を天上の「かささぎの橋」にたとえて詠んだものであると解釈されている。そしてこれ以降、多くの注釈書がこの解釈に従っている。また、『大和物語虚静抄』は家持の歌を忠岑の歌の本歌であると指摘していることも注目しなければならぬ。『大和物語』一二五段において、「かささぎのわたせる橋」は、「天上の天の川」とする説、「宮中の橋」とする説、「時平郎の階段」とする説の三通りの解釈が確認できた。では、現在通説となつて「時平郎の階段」説において、本歌として指摘される家持の歌はどのような歌なのか。家持歌において「かささぎのわたせる橋」はどのような解釈されているのだろうか。

家持歌の「かささぎのわたせる橋」

かささぎのわたせる橋に置く霜の白きを見れば夜は更けにけり

この歌は『家持集』初出の歌であり、『万葉集』には収載されていない。『家持集』は作者不明歌や後代の歌人の歌も多く含まれるため、この歌の作者が家持であることも、忠岑の歌との前後関係も明確ではない。し

かしながら、五句目が「夜ぞふけにける」と異同があるものの、『新古今集』や『百人一首』にも採られているよく知られた歌であること、忠岑の歌と同様に「かささぎのわたせる橋」に霜が置くことを詠む歌であることから、重要な参考歌であるといえるだろう。

この家持の歌がどのように解釈されてきたのかを見てみると、「かささぎのわたせる橋」は忠岑の歌と同様に古くから「天上の天の川」と、「宮中の橋」の両説が唱えられてきたことがわかる。古くは細川幽斎が『百人一首抄』で「かささぎのわたせる橋」を「天上の天の川」を意味しているとして、荷田在満『百人一首解』や賀茂真淵の『宇比真奈備』では「宮中の橋」を意味するとしたが、近年では、堀勝博氏が「かささぎのわたせる橋」が「宮中の御階」を表すという明確な証拠はどこにもないことを指摘された。堀氏は、荷田在満や賀茂真淵が「かささぎのわたせる橋」を「宮中の橋」とする根拠に挙げた『全唐詩』における「烏鵲橋」の用例を再検討され、それらがあくまで「天漢」を意味していることを明らかにした。また、『大和物語』一二五段の忠岑「かささぎのわたせる橋」を「宮中の御階」とする真淵の説についても、「御階のもとに」などがあることから、「かささぎの（わたせる）橋」が宮中の御階を直接さすものと早合点したわけである」として、宮中の橋説を否定している。堀氏は、「かささぎの橋」は七夕伝説の寓意を含む表現で在り、男女の逢いがたい関係を意味するとし、家持の歌を閨怨詩的な歌であると解釈している。この堀氏の説を受け、小林賢章氏は家持の歌の詠歌時間を検討し、少なくとも定家の時代には「かささぎのわたせる橋」は「夜空の天の川」を意味しており、曉方に女が男の来ないことを嘆く閨怨の歌であったと指摘している。また、『家持集全釈』や『新日本古典文学大系 新古今和歌集』なども、家持歌の「かささぎのわたせる橋」を天の川に

鵲がかけた橋であるとしており、近年では宮中の御階説ではなく、天上の天の川説で解釈される傾向にあるといえる。

以上のことから、『家持集』や『新古今集』に見える家持の歌も、『大和物語』一二五段の忠岑の歌と同様に「かささぎのわたせる橋」について諸説あることがわかった。

そして、『大和物語虚静抄』は家持の歌が忠岑の歌の本歌であると指摘していたが、現状では家持の歌は「天上の天の川に渡した橋」説が主流となっており、『大和物語』では「御殿の御階」説が主流となっている現状を確認しておきたい。

『古今集』時代の歌を通して見る忠岑歌

本論では、『大和物語』の忠岑歌が「かささぎのわたせる橋」という表現を用いることで、どのような効果を期待し、何を表現しようとしたのかを家持歌と切り離して検討する。なお、この『大和物語』の忠岑歌は、『古今集』や『忠岑集』などに他出がなく、忠岑の歌であるかどうかは断定し難い。しかし、本論では仮に忠岑の歌であると考え、近い時代の例を検討することによって「かささぎのわたせる橋」が何を表現しているのかを考えてみたい。

まず、『大和物語』一二五段において、忠岑の歌の眼目はどこにあったか。この「かささぎの……」の歌は、夜中の突然の訪問に「いづくにものしたまへるたよりにかあらむ」と言う時平に対し、主人に代わって「どこかに行ったついでではなく、時平様にお会いするために参上したのです」と訪問の挨拶を伝えることであった。ここにおいて、忠岑歌で重要な役割を果たすのが、「ことさらにこそ」という表現である。忠岑

は、「ことさらにこそ」と強調した上で「参りつれ」などの語を省略し、どこかのついでに訪問したのではなく、意図して参上したのだということとを訴えている。「ことさらに」と詠む同時代例はいくつか見られるものの、「ことさらに」に見にこそ来つれ桜花道行きぶりと思ふらむやぞ（躬恒集・七五）のように、いずれも「ことさらに」何をしたのかは歌の中に明確に詠み込まれている。しかし、忠岑歌は、敢えて「ことさらにこそ」と詠み放つことで、この歌において一番重要な、何かのついでではなく、意図しての参上であることを強調していると考えられる。

では、「ことさらにこそ」の前提となる「かささぎのわたせる橋の霜の上を夜半に踏み分け」という表現を通して忠岑が何を伝えようとしたのか考えたい。問題となる「かささぎのわたせる橋」は後に回し、先に「霜の上を夜半に踏み分け」の部分について検討する。忠岑と近い時代には、「霜」を「踏み分く」と詠む例は見出すことができない。『古今集』において、人が何かを「踏み分く」と詠んでいる例を次に挙げる。

題しらず

あきは来ぬ紅葉は宿に降りしきぬ道踏み分けてとふ人はなし

（古今集・秋歌下・二八七 よみ人しらず）

題しらず

踏み分けてさらにやとはむ紅葉葉のふりかくしてし道とみながら

（古今集・秋歌下・二八八 よみ人しらず）

題しらず

わが宿は雪降り敷きて道もなし踏み分けてとふ人しなれば

（古今集・冬歌・三三二 よみ人しらず）

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

みよしのの山の白雪ふみわけて入りにし人のおとづれもせぬ

（古今集・冬歌・三三七 壬生忠岑）

惟喬親王のもとにまかり通ひけるを、頭おろして小野といふ所に侍りけるに正月にとぶらはむとてまかりたりけるに、比叡の山の麓なりければ雪いと深かりけり、しひてかの室にまかり至りて拝みけるにつれづれとしていと物悲しくて帰りまうで来て詠みておくりける

忘れては夢かとぞ思ふ思ひきや雪踏みわけて君を見むとは

（古今集・雑下・九七〇 なりひらの朝臣）

二八七番歌は、秋になって紅葉が降り敷き、道を「踏み分けて」自分を訪ねて来る人はいない、と詠む。つまり、紅葉が道を覆い隠している状況であっても、自分に逢いに来てくれる人の行動として、障害となる紅葉を「踏み分けて」訪れる、と詠んでいることがわかる。また、隣に配列される二八八番歌は、自分を通さないように紅葉が道を隠したのだと知つていながら、その紅葉を「踏み分けて」訪ねたものか、と詠んでいる。この二首は、贈答歌的な配列が指摘される歌であり、あなたは私に飽きたので通って来ないのでしょうか、と女が男に歌を贈り、男の答歌ではそちらが私を拒んだのだ、と応じているように見える二首となっている。この二首において、紅葉は訪問の障害となるものであり、訪問するためにはそれを「踏み分け」て行かねばならない、という構図となっていることがわかる。また、冬歌に収載される三三二番歌の場合、自分の住まいには雪が降り敷いて道もなくなっており、この雪を「踏み分け」て私を訪問する人もいない、と詠み、「踏み分く」対象は雪であるものの、二八七番歌と非常に似通った発想の歌であるといえる。よって、この三首を通して、『古今集』の和歌において「踏み分く」という語が、訪問の障害となるものがあっても、それを「踏み分けて」違いに行く、とい

う文脈で用いられていることがわかる。

忠岑の歌である冬歌の三七番歌は、吉野の山の白雪を踏み分けて入山した人が、それ以来便りもよこさない、と詠む歌であるが、入山の際に踏み分けた白雪はやはり行く手を阻むものであり、「踏み分く」という語を用いることで、その山の雪深さや入山の困難さが表されているといえる。また、雑歌下の九七〇番歌は、比叡山の麓に隠棲した惟喬親王を訪ねた業平が、こんな比叡山の麓まで雪を「踏み分け」てお会いすることになるかとは思ひもなかった、と詠んだ歌である。詞書に「しひてかの室にまかり至りて」とあることから、業平が「踏み分け」た比叡山の麓の雪は、やはり訪問の障害となるものであったといえる。

以上の『古今集』の例から、人が何かを「踏み分く」という表現は、進路の障害となるものがあり、それでも目的を達成するために障害物を乗り越えて進むというイメージを含有する表現であることがわかった。そして、『大和物語』の忠岑歌と同様に、訪問に際して用いられることが多く、それらは障りとなるものがある状況であつても、訪問の目的を達成するために障害物を「踏み分け」という発想で詠まれる傾向が認められる。『大和物語』の忠岑歌は「霜」を夜半に踏み分けて「ことさらに」参上した、と詠んでいる。ここで訪問の障害となるのは「霜」であり、それを「踏み分く」という表現を用いることで、時平を訪問するという目的を達成するために、霜が降りるような寒い夜中であるにも関わらず、困難を乗り越えて訪問したことを表現したものと考えることができる。

『古今集』時代の歌を通して見る「かささぎのわたせる橋」

自体と「霜」の取り合わせが受け入れられていたことは確かである。

以上のことを踏まえると、『大和物語』の忠岑歌の「霜の上を夜半に踏み分けことさらにこそ」の部分は「霜が降りるような寒い夜中であるにも関わらず、困難を乗り越えて時平様に逢うために、ことさらに参上したのです」という解釈になる。この部分だけだと、「霜の上を、この夜更けにふみ分けて、わざわざうかがったわけで、よそへ行ったついでではございません」と現代語訳する『新編全集』と大きく変わるものではないように見える。しかしながら、『古今集』時代における表現の傾向を踏まえると、忠岑の歌は「時平に逢いたくて、そのために困難な状況の中にとさらにやって来たのだ」という、より切実な感情を表現しようとしていることがわかる。

ここで、もう一度忠岑歌の「かささぎのわたせる橋」についての先行する解釈を確認しておく。一つは、「空に天の川がかかる実景」とするもの、二つ目は「宮中の橋」であるとすること、三つ目は「時平邸の御階」とするものであった。これを踏まえ、『大和物語』一二五段の忠岑の歌が仮に実際に忠岑が詠んだものだとすると、近い時代の歌で「かささぎの橋」がどのように用いられたのか、どのようなイメージを持って使用される表現であつたのかを検討したい。

忠岑と同時代までの「かささぎの橋」を詠んだ歌は『伊勢集』、『貫之集』、『躬恒集』にそれぞれ一首ずつ見出すことができる。まず、『貫之集』と『忠岑集』の歌について検討する。

天川水たえせん鵲の橋をし知らずただ渡りなん

（貫之集・六一三）

かくしつつあるべきものかかささぎのわたせる橋も隔たらなくに

なぜ訪問の障害となる霜は「かささぎのわたせる橋」の上に置かれたのだらうか。「かささぎの橋」は七夕伝説に由来する早秋の表現といえるが、晩秋や冬の景物である「霜」と組み合わせ用いられている。季節の不一致から違和感を覚える取り合わせだが、「かささぎの橋」と「霜」がともに詠まれた歌は複数見いだすことができる。

夜や寒き衣や薄きかささぎのゆきあひの橋に霜やおくらん

（古今六帖・かささぎ・四四八九）

十月はて

かささぎのちがふる橋の間遠にて隔つるなかに霜やふるらん

（好忠集・三〇八）

また、「かささぎの橋」ではないが、次に挙げる歌のように、「かささぎ」と「霜」を取り合わせた例も見出せる。

かささぎの羽に霜ふり寒き夜をひとりやわが寝ん君待ちかねて

（古今六帖・ひとり寝・二六九八・人まろ）

この「かささぎ」と「霜」取り合わせについて、『歌ことば歌枕大辞典』の「鵲」の項目では、鵲が「腹面と肩羽が白色、他は金属光沢を帯びた黒色という色彩的特徴をもつ」とし、その外見の色彩的な要因によって「かささぎ」と「霜」が共に詠まれることを説明された。また、田中幹子氏は「平安人の「七夕」伝説の受容は、主に別れの際の緊迫した感情を詠もうとするものであった」として、「独り寝の寒さ」を嘆く場面に美を見いだした結果、「かささぎ」と「霜」が共に詠まれるようになったのだと指摘している。諸説あるものの、なぜこのような取り合わせが定着したのかは未だ確証を得ない。しかしながら、当時「鵲」それ

（忠岑集・五八）

まず、『貫之集』の歌は、天の川の水が絶えてしまつてほしい、そうであるならば、かささぎの橋を知らずとも直に渡ることができるだろう、という歌である。ここでの「かささぎの橋」は、七夕伝説を背景に、天の川に架かった恋人に逢うための橋として詠まれていることがわかる。また、『忠岑集』の歌は、このようなままでよいはずがあるのか、かささぎが渡した橋も隔たつていないのに私達の仲は疎遠になつていく、という歌である。この歌においても、「かささぎの橋」はやはり七夕伝説を踏まえて用いられていると考えられる。恋人に逢うための「かささぎの橋」も隔たつておらず、渡つて逢いに來ることができはずなのに逢いに來ないため、二人の仲も疎遠になつてしまった。つまり、この『忠岑集』の歌は、七夕伝説を背景に、女性の立場で男の訪れを待つ歌であると考えられるのである。

この二首において「かささぎの橋」は、いずれも宮中や誰かの御殿の橋として用いられているのではなく、七夕伝説を踏まえて「恋人に逢うために渡る橋」として用いられていた。

次に、『伊勢集』の歌についても検討する。

心のみ雲居のほどに通ひつつ恋こそまされかささぎの橋

（伊勢集・四二三）

伊勢の歌について、『伊勢集全釈』は「雲居」と「かささぎの橋」がともに宮中に関わる表現であることから、「かささぎの橋」について「宮中殿舎の御階をさし、ひいてはそこにいるはずの宮中高貴の人物をさしているもののように思われる」と指摘する。たしかに、「雲居」も「かささぎの橋」も天上のイメージによつて宮中を連想する表現であるとい

える。しかし、この「雲居」は、

あひ知りて侍りける人の東の方へまかりけるを送るとて詠める
雲ゐにも通ふ心のおくれねばわかと人に見ゆばかりなり

(古今集・離別・三七八 深養父)

の歌のように、遙か遠くを意味して用いられていると考えるのが穏当な
のではないだろうか。伊勢の歌は、心だけは遙か遠くに通いながら、恋
しい人が自分に逢うために渡ってくる「かささぎの橋」に恋しさがまさ
る、と詠む歌である。ここでいう「かささぎの橋」は、本来の性質通り
七夕伝説を踏まえ、なかなか逢うことのできない恋人が自分に逢いに来
ることを暗示する表現として用いられていると考えられる。

伊勢の歌の他に、『敦忠集』にも「雲居」と「かささぎの橋」を共に
詠む歌がある。

やむごとなき人に

くもゐにて雲居に見ゆるかささぎの橋を渡ると夢に見るかな

(敦忠集・六)

夢なれば見ゆるなるらむかささぎはこの世の人のこゆる橋かは

(敦忠集・七)

この二首は、『敦忠集注釈』によって敦忠と醍醐天皇皇女雅子内親王に
よる贈答歌であろうことが指摘され、やはり「雲居」「かささぎの橋」
は宮中、宮中の御階を表す表現として解されている。贈歌は、「くもゐ」
で「雲居に見える鵲の橋」を渡ると夢に見ることですよ、と詠む。「く
もゐにて雲居に見ゆる」と詠み直していること、また、歌を贈る相手が
雅子内親王であるとするならば、一句目の「くもゐ」はやはり宮中を指
して用いられているものと考えられる。そうであると、二句目以降に詠
まれる「雲居に見ゆるかささぎの橋」の「雲居」は宮中ではなく、遙か

めに渡る橋として用いられていたことが確認できた。

『大和物語』一二五段「かささぎの…」の歌

これまで、『大和物語』一二五段「かささぎの…」の歌の表現が、
忠岑が活躍していた当時にとのようないメージで用いられていたのかを
検討してきた。それらを踏まえて、改めて『大和物語』の忠岑の歌につ
いて考えてみたい。

かささぎのわたせる橋の霜の上を夜半にふみわけことさらにこそ
『大和物語』一二五段で、余所で酒を飲み、酔った状態で突然訪問した
定国に、時平が「いづくにもものしたまへるたよりにかあらむ」と言った
状況下で忠岑が詠んだ歌である。これは、忠岑は主人に代わって、どこ
かで酔った勢いで、無礼な訪問ではないことを挨拶の歌として詠んだ
ものと考えられる。

前述の通り、『古今集』の時代に「かささぎの橋」は、七夕伝説を背景に、
恋人に逢うために渡る橋として使用されていた。牽牛と織女が一年に一
度しか逢えないのと同じように、なかなか逢うことのできない相手に逢
いに行くための橋である。『大和物語』の場合、男性から男性に贈る歌
であって、恋の歌ではない。しかしながら、あなたに逢いたくてやって
来た、という気持ちを七夕伝説によそえ、このように詠むことで年に一
度だけ織女に逢うことができる牽牛のような、切なる思いを表現しよう
としたのではないだろうか。その切なる思いは、「ふみわけ」という語
においても表現されている。「踏み分く」という語は『古今集』では障
害となるものを乗り越えて人を訪れる際に用いられる表現であった。こ
れを踏まえて『大和物語』の忠岑歌を考えると、あなたに逢いたくて、

天上を指していると考えられ、「遙か天上に見えるかささぎの橋」とい
うことになる。また、「雲居に見ゆる」と詠むことで、内親王との身分
の隔たりをも表現しているであろう。この贈歌は「あなたのいらっし
やる宮中で、はるか天上に見えるかささぎの橋を渡ると夢に見ること
ですよ」という趣旨の歌になる。ここでいう「かささぎの橋を渡る」とい
うのは、かささぎの橋を渡って、あなたに逢いに行くことを夢に見る、
ということであり、やはりこの歌も七夕伝説を背景に、逢うことが困難
な恋人に逢うために渡る橋として「かささぎの渡せる橋」が用いられ
ていると考えられる。そうであるからこそ、答歌では、かささぎの橋は現
実の人が渡る橋なのでしょうか、伝説上の牽牛とは違って、「この世の人」
である敦忠は現実にはかささぎの橋は渡れないのだ、と返しているの
ではないだろうか。

『伊勢集』の歌も、『敦忠集』の歌も、「雲居」と「かささぎの橋」を
共に詠んでおり、「雲居」が宮中の意味も有する語であることから、「か
ささぎの橋」を「宮中の御階」を指すという指摘も見受けられた。しかし、
和歌の中で「かささぎの橋」という語はどちらも「逢うのが困難な恋人
に逢いに行く橋」として用いられていた。「かささぎの橋」に宮中や御
殿の橋の意味を持たせようとすることは不可能ではないだろうか、本来
の「かささぎの橋」という語の性質を考えると、そのように解釈する必
然性は見いだすことが出来ない。「雲居」と「かささぎの橋」は宮中に
関わる語ではあるものの、それ以前に天上に関わる語なのであり、共に
用いられているからといって「雲居」を「宮中」「かささぎの橋」を「宮
中の御階」を指すとする必然性はないのではないだろうか。

以上のことから、「かささぎの橋」という語が、忠岑が活躍してい
た『古今集』時代においては一貫して七夕伝説に基づき、恋人に逢うた
牽牛さながらにかささぎの橋に置いた霜を夜中であるにも関わらず踏み
分けて、ことさらにあなたに逢いに来ました、ということになる。これ
は、余所のついでではなく、時平に逢うためにやって来たのだという忠
岑の意図を十分に満たした歌なのではなからうか。

一方、「かささぎのわたせる橋」を「宮中や貴人の邸宅を天上になぞ
らえて、その階段をいう」として、時平邸の階段と解釈する現在の通説
では、天上世界にあるような素晴らしいあなたの御殿の御階の上に置い
た霜の上を夜中に踏み分けて、ことさらあなたに逢いに来ました、とい
う歌になる。通説通りに解釈すると、「かささぎのわたせる橋」は、夜
中の突然の訪問に際し、「天上界のかささぎの橋のようなあなたの素晴
らしい御殿の橋」という媚びた表現として用いられていることになる。
このように見てくると、『大和物語』の忠岑の和歌において「かささぎ
の橋」を「時平邸の御階」と訳さなければならぬ根拠は乏しいことが
わかる。そして、「かささぎの橋」が本来持っている七夕伝説のイメー
ジ通りに解釈しても、十分に物語の内容に沿った和歌として解釈できる
のである。

忠岑がこのを詠んだ後には「あるじの大臣、いとあはれにをかしとお
ぼして、その夜、夜ひと夜、大御酒まゐり、遊びたまひて、大將も物か
づき、忠岑も禄たまはりなどしけり」とある。時平が「いとあはれにを
かし」と思ったのは、自分の御殿の階段を「かささぎの橋」に喩えたこ
とのだろうか。むしろ、恋の題材であった「かささぎの橋」を効果的
に応用して、牽牛が織女に逢いたい一心で橋を渡るような切なる思いを
表現したことこそが、時平を「いとあはれにをかし」と思わせたのでは
ないだろうか。少なくとも、『古今集』の時代において、「かささぎの橋」
を宮中や御殿の橋として解釈しなければならぬ必然性は認められず、

それは『大和物語』一二五段においても同様である。忠岑の歌の「かささぎのわたせる橋」は、御殿の橋を喩えたものではなく、七夕伝説を踏まえて牽牛が織女を訪れる時のように、逢いたい一心で訪問する道すがらを表現していると考えられるのではないだろうか。

注

- (1) 『大和物語』の引用は『新編日本古典文学全集 大和物語』（小学館・平成六年）に拠った。
- (2) 『白孔六帖』の「鵲」の項目に「淮南子烏鵲填河成橋而渡織女」とあるが、現在に伝わる『淮南子』の本文には見られない逸文である。引用本文は『四庫類書叢刊白孔六帖』（上海古籍出版社・平成四年）に拠った。
- (3) 高橋正治ほか『新編日本古典文学全集 竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』（小学館・平成六年）
- (4) 森本茂『大和物語全釈』（大学堂書店・平成五年）
- (5) 雨海博洋・岡山美樹『講談社学術文庫 大和物語』（講談社・平成十八年）
- (6) 和歌の引用は全て『新編国歌大観DVD・ROM版』の本文に拠るもので、適宜表記を改めた。
- (7) 高橋貞一編『古典文庫 大和物語抄』（古典文庫・昭和五四年）に拠り引用した。
- (8) 『賀茂真淵全集 第十六巻』（久松潜一・小町谷照彦監修続群書類従完成会・昭和五六年）に拠り引用した。
- (9) 雨海博洋編『大和物語諸注集成』（桜楓社・昭和五八年）に拠り引用した。
- (10) 荒木尚編『百人一首注・百人一首（幽斎抄）』（和泉書院・平成三年）
- (11) 荷田在満『荷田全集 第七巻』（吉川弘文館・昭和六年）
- (12) 『賀茂真淵全集 第一二巻』（久松潜一・小町谷照彦監修続群書類従完成会・昭和六二年）
- (13) 堀勝博「鵲の渡せる橋に置く霜の」―百人一首家持歌の解―（『和歌文学研究第六〇号・和歌文学会・平成二年四月』）
- (14) 小林賢章「かささぎの…」の歌の詠歌時間―「夜ぞ更けにける」の解釈―（『同志社女子大学日本語日本文学』第二六号・同志社女子大

- (15) 学日本語日本文学会・平成二六年六月）
- 島田良二『家持集全釈』（風間書房・平成十五年）は資経本を底本とするが、西本願寺本と書陵部本は『新古今集』・『百人一首』と同様に結句が「よぞふけにける」となっていることから、これらは西本願寺本か書陵部本のいずれから採った可能性を指摘している。
- (16) 田中裕・赤瀬信吾『新日本古典文学大系 新古今和歌集』（岩波書店・平成四年）
- (17) 片桐洋一『古今和歌集全評釈（上）』（講談社・平成十年）
- (18) 久保田淳・馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店・平成十一年）
- (19) 田中幹子「鵲について―平安詩歌を中心に―」（『札幌大学女子短期大学部紀要・第二七号・札幌大学・平成八年三月』）
- (20) 関根慶子・山下道代『伊勢集全釈』（風間書房・平成八年）『新編国歌大観』と同様に西本願寺本を底本としている。
- (21) 木船重昭『敦忠集注釈』（大学堂書店・昭和六一年）は西本願寺本を底本とするが、御所本には七番歌の詞書に「かへし」とあることを指摘している。